

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/ TEL:0798-54-6019

キリスト教平和学研究の新たな展開

キリスト教と文化研究センター長 神田 健次



二〇一〇年四月より、キリスト教と文化研究センター（RCC）のセンター長に就任いたしました神田健次と申します。よろしくお願ひします。

キリスト教と文化研究センターは、一九九七年四月に発足して以降、一三年の歩みを刻んできました。それまでのキリスト教主義教育研究室を大学における研究機関として改組し、今日のグローバルな世界から大きなチャレンジを受けてきている諸問題を受け止め、学際的な対話を通してキリスト教の視座から共同研究を重ねてきました。

これまでRCCの研究活動は、さまざまなフォーラムや研究会において推進され、また学術紀要『関西学院大学キリスト教と文化研究』においても研究成果が公表されて

います。さらに、これまでフォーラムや研究会の成果は、『生命科学と倫理』、『民と神と神々と』、『アメリカの戦争と宗教』、『スピリチュアルケアを語る』、『暴力を考えるーキリスト教の視点から』、『平和創造への道』などの数多くの著書として公にされてきています。とりわけ昨年の秋には、『キリスト教平和学事典』が出版され、キリスト教の視点から平和の諸問題に取り組んだ日本初の平和学事典として大きく注目されました。

今春より、RCCでは、「ミナト神戸に宗教多元主義を探るー八海のシルクロードVの文化と宗教的共生」、『聖典と今日の課題（継続）』、『文化／社会抵抗における原動力としての聖書受容の諸相』、そして「キリスト教主義教育」という四つの共同研究のプロジェクトを立ち上げて、それぞれ推進してきています。最初の共同研究のプロジェクト「ミナト神戸に宗教多元主義を探るー八海のシルクロードVの文化と宗教的共生」は、RCCの今年度における主要な共同研究として位置づけられ、キリスト教平和学研究の新たな展開と言えます。

共同研究のメンバーは、山本俊正（商学部教授）、栗林輝夫（法学部教授）、畠山保男（RCC教授）、ヘアマンセン・クリスチャン（法学部教授）、村瀬義史（総合政策学部専任講師）、オムリ・ブージッド（総合政策学部非常勤講師）、除亦猛（神学部非常勤講師）、そして筆者がコソヴィナーを努めています。

ミナト神戸には、古くから神道の神社や仏教の寺院が存在していましたが、特に近代の開港以降、神戸が海外交易の重要な拠点として大きく発展する中で、キリスト教、イスラーム、ユダヤ教、ジャイナ教などの多彩な宗教施設が設立されてきました。筆者は、一九九〇年代初めから神戸YMCAにおけるキリスト教使命のプロジェクトの責任を委託され、その取り組みの中で神戸の宗教的多元主義の状況に気づかされ、特に阪神淡路大震災の折には、民族、宗教、国籍の違いを超えて地域住民として助け合う姿に触れる機会も与えられました。

共同研究では、このようなミナト神戸における宗教の多元的状況の歴史的展開を探りつつ、これまでフィールドワークとミニ・フォーラムを実施してきました。フィールドワークでは、神戸における各宗教の歴史とその共同体の特色、及び地域社会との関わりなど



【ミニ・フォーラム開催】
10月21日「神戸モスクの歴史と地域社会の繋がり」

を調査研究してきました。第一回（六月二十四日）は、神戸ハリストス正教会とカトリック神戸中央教会を訪れましたが、とりわけ震災以降、三つのカトリック教会が統合して献堂した壮麗な新会堂と新たな地域社会との共生プロジェクトは印象深いものでした。また第二回（七月一日）のフィールドワークでは、神戸モスク、関帝廟、本願寺神戸別院（モダン寺）を訪れました。特に静謐なモスクでのひとはまさに異文化経験であり、そこでのイスラームの教え及びキリスト教との対話、またそのコミュニティの課題についての説明は興味深いものでした。そして第三回（十一月四日）は、神戸ジャイナ教寺院、神戸北野天満神社、関西ユダヤ教の会堂、神戸中華教会を訪れました。ジャイナ教寺院で

は、荘厳な寺院での祈りの光景と併せて、指導的な働きを担っておられる女性のメンバーから、ジャイナ教の特色や神戸におけるインド人の共同体とジャイナ教の役割などについて語っていただき、豊かな対話の時間が与えられました。

またミニ・フォーラムは、一月二日に神戸モスクの新井アハサン氏をお招きして開催されました。「神戸モスクの歴史と地域社会とのつながり」と題する講演において、アハサン氏は、神戸モスクの歴史とイスラームの教えの概要について語られた後、地域共同体との関係に言及され、特に阪神淡路大震災において国境や宗教の壁を越えた相互に支え合う経験を語られました。また、イスラームの食物規定との関係でお子さんの学校給食においてご苦労された経験や、土葬以外認めない立場から生じる新たな墓地取得の問題など、神戸モスクのコミュニティが直面してきた地域社会における困難な問題についても語られ、意義深いフォーラムをもつことができました。

共同研究の今後の計画としては、さらにフィールドワークやミニ・フォーラムを積み重ねつつ共同研究を推進し、その新たなキリスト教平和学の研究成果を講演会や著書において公にしたいと願っています。

RCCプロジェクト 「聖典と今日の課題」について

キリスト教と文化研究センター副長 樋口 進

このプロジェクトは、二〇〇五年より始められた。その目的は、現代社会が抱える諸課題を広く視野に入れつつ、キリスト教のメッセージが持つ今日的意義を明らかにするためにどのような聖書解釈が必要かを吟味することである。当初の研究員は、辻学（商学部助教授）、水野隆一（神学部教授）、嶺重淑（神学部専任講師）、樋口進（RCC教授）であったが、その後土井健司（神学部教授）も加わった。各学期二回程度の公開形式での研究会における研究発表と討



【ミニ・フォーラム開催】6月30日「仏教の老病死と現代における命の問題」

議を軸としながら、聖典解釈に関する認識を深めていった。最初の四回分の成果は、質疑応答をも含めて、本として出版された（辻学、水野隆一、嶺重淑、樋口進著『聖書の解釈と正典』キリスト新聞社）。二〇〇七年度からは、「聖典と現代社会の諸問題」という内容で続けられ、研究員だけでなく、他宗教の方をも招いて研究会やミニフォーラムを行った。そこで扱われたテーマは、「八聖書に書いてあるからVというのが本当の理由なのだろうか？—同性愛を罪とする聖書テキストを読む—」（小林昭博関西学院大学大学院奨励研究員）、「聖書と生命倫理」（土井健司神学部教授）、「聖書とエコロジー」（樋口進（RCC教授）、「ルカにおける愛の思想—善きサマリヤ人の譬えと愛敵の教えを中心に—」（嶺重淑人間福祉学部准教授）、「旧約における格差社会—預言者の批判を中心に—」（樋口進RCC教授）、「クルアーンとパレスチナ問題」（オムリ・ブージットRCC研究員）、「大本と臓器移植の問題」（斎藤泰（大本本部教学研鑽所研鑽室室長）、「仏教の老病死と現代における命の問題」

題」（松田史（真言宗御室派僧侶・NCC宗教研究所研究員）、「生命倫理における聖書の役割の変遷と現在」（土井健司神学部教授）、「新約聖書に見る格差社会」嶺重淑人間福祉学部准教授）である。

これらのテーマは、現代社会において起こっている重大な問題であるが、聖典の立場からどのような

な提言ができるかの試みである、と言っている。毎回の研究会・ミニフォーラムは、数人〜十数人の参加者であったが、いつも発表の後、活発な質疑や討議が行われた。これらの発表も何らかの形で公にしたいと考えており、現在テープ起こしをしている。

「召命 (vocation) — 誓われぬカニシム」

二〇一〇年十一月二五日

神戸女学院大学教授 内田 樹氏



お会いして、武道における師弟関係というものを学びました。多田先生との師弟関係が僕にとつて「学び」ということの原型になっています。

長く武道を稽古しておりまして、大学でも合気道と杖道の指導をしています。社会人のための道場もすでに芦屋で二〇年続けています。僕の基本的な価値判断、ものの考え方は、感じ方のベースを作っているのは、武道の修業です。

二五歳のときに、多田宏先生に

入門して数日後に、自由が丘道場の納会に参加しました。そこではじめて先生にご挨拶をしました。そのとき、「内田君はどうして入門したのですか」と訊かれましたので、「喧嘩に強くなろうと思って」と答えました。考えてみたら、本当にひどい答えだったのですが、意外なことに、先生はにっこり笑って、「そういう動機で始めてもいい」とおっしゃったのです。こ

れには驚きました。そして、そのときこの先生を生涯の師にしようと思ったのです。先生は僕に向かつて「君はこれから私に就いて、君がそんなことを学ぶつもりがなかったことを学ぶことになるであろう」と宣言されたわけです。奇妙なことですが、「君が学ぼうと思

っていることを教えよう」と言っていたからではなく、「君が学ぶつもりがなかったことを教えよう」と言ったので、私は「この人が私の師になるべき人だ」と思ったのです。「学び」とはこのようなダイナミックな構造のものだということ

をそのときに知りました。人は「これを学ぼう」と思っ

て師に就くわけではありませ

ん。何

を学ぶこと

になるの

か

わ

か

わ

か

わ

か



に判断すると、あの木の後ろに隠れているのがわかる。遊びのかたちをとっていますけれど、これは「見えないものを感知する」ための訓練だと僕は思います。そして、これこそが実は教育の一番基本に

来るべきことだと思っております。孔子は『論語』で「六芸」ということを述べています。礼・楽・射・御・書・数です。孔子が第一に挙げて

霊的なもの

鬼神を敬して、

センサーの感度を上げて、この潜在的に大きな危険を伴う「見えないもの」に関わらなければならぬ。孔子はこのための儀礼の体系を整えることを教育の第一に置きました。

六芸の第二の「楽」というのは音楽を聴き、演奏することです。それができるためには、「もう聞こえなくなった音」がまだ聞こえて、「まだ聞こえない音」を先取りに聞いているということが必要です。それができなければメロディもリズムも感知できません。それは言い換えれば、過去と未来に感

覚の触手を伸ばして、現在のうちに引き寄せるとい

「まだ存在しない音」と「まだ存在しない音」を今ここで聴くことができる人しか音楽は聞こえない。楽とは「聞こえない音を聞く」能力の開発プログラムです。孔子の六芸の冒頭にあげた二つの教科は「存在しないもの」とかかわる力を育成するためのものです。これがすべての教育の根本になければならない。人間にとって最初に開発すべき能力は「見えないものを見る」、「聞こえないものを聞く」、「触れていないものに触れることができる」、そういう感

覚の射程の拡大なのだ

僕は思います。残念なことに、現代の教育はこの人間の能力の開発にはほとんど関心を示しません。それが「霊的なもの」に対する感

覚の衰えとして結果しているのではないかと僕は思います。今日の

本題の「召命」(vocation)というものは、「呼ばれること」です。日常語としての vocation は「天職」を意味します。「天職」を表わす英語はもう一つ calling というのがあります。vocation と calling も「他者に呼ばれる」という passive な経験を指しています。

聖書の vocation についての印象深いフレーズは、「コリント人への第一の手紙」の第七章にあります。そこには「おのおの自分が召されたときの状態にとどまっていなさい」とあります。それは神に呼ばれた者は、その場で神の声を聞かなければならないということ

では、とても召命には応えられませんが、「せん」という言い訳は許されたい。呼ばれた当のその場で、ただちに神に負託されたつとめを果たさなければいけない。この「ただちに」ということを僕は素晴らしい考え方だと思っています。

みなさんの中には就活をされている方がおられると思いますが、僕はゼミの学生たちに「天職は探すものではなく、向こうから呼ばれるものだ」ということを繰り返して聞いています。浮き足だつて走り回れば天職に出会えるということとはありません。大事なことは、自分を呼んでいる声が聞こえるまで、じつと静かに耳を傾けることなのです。

みなさんが天職に出会うために必要なものは、知識や技術ではありません。コミュニケーション能力が高いとか自己PRがうまいとか、そういうことではありません。人間にもっとも必要な社会的能力は自分に向かう呼びかけを正しく聴き取る力です。呼びかけられたときに過たず「これは私宛ての言葉だ」と確信できる力です。つねに自分宛てのメッセージを聞き漏らさないように心身の備えをしておくこと。

神が召す声について、事前にカタログやガイドラインがあるわけではありません。「こういう声が聞

こえたら、それは『神の声』だから、聞き漏らさないようにね」ということは誰も教えてくれません。いきなり、自分の語彙には存在しない語で、自分の手持ちの度量衡ではその意味も価値も考量できないメッセージが到来する。それを

過たず聴き取らなければいけない。タイトな条件のようですけれど、僕たちにはそれが出来ます。そのため潜在能力が備わっているから。要はそのポテンシャルを時間をかけてゆつくり開発してゆつくりということ。その訓練さえ怠っていないければ、召命を聴き落とすことはないはず。

とりあえず、若い人にお勧めしているのは、「聴く」ということです。それから、「待つ」ということ。これは多分若い諸君が最も苦手なことでしょう。今は逆ですからね。重大な事案に臨むと、皆浮き足立って、じたばた大騒ぎする。大声を上げる。そういう状態で微かなシグナルとしての vocation が聞き取れるはずがないのです。

聴くための基本的な構えは「祈り」です。「祈る」ことの一番よい点は言葉にならないということです。自分は一体何を求めているのだらうということが分からない。みなさんも初詣に行ったりしたとき、自分の番が回ってきたときに、とっさに手を合わせても、いった

い自分は何を祈ったらいのか分からなくなつて、「家内安全」とか「学業成就」とかいう出来合いのフレーズしか思い浮かばなかったという経験がおありだと思えますが、祈りというのはわりとそういうものなのです。自分の欲望を外に向けて言語化し、表出するということではありません。それよりはむしろ内に向かつて、深く沈潜してゆく。ですから、祈る人は静かな場所で、手を合わせ、深い呼吸をして、自分の中にある、未だ言葉にならない、泡立つように心身の奥底から湧き出てくる何かに耳を澄ませます。

そういう時間が僕は青年に一番必要な時間ではないかと思えます。「聴く」「待つ」「祈る」ということができるのが青年の特権です。そういうイノセントで、傷つきやすい心の構えをみなさんにはできるだけ長く維持していただきたいと思えます。それは、生き延びる上で、ほんとうに大切なことだからです。みなさんが生き延びて、成熟して、幸福な人生を全うしたいと願うならば、何よりも、「見えないものに目を凝らし」、「聞こえないものに耳を澄ませ」、「触れていないものをありありと実感する」、そういう種類の感覚の射程を拡げてゆくことを日ごろから心がけていただきたいと思えます。

関学の標語は「マスター・フオー・サービス」ですね。「仕える仕方を学ぶ」というふうに僕は理解しましたけれど、「サービス」というのは「神に仕える」ということでもありますし、「与えられた責務を果たす」ということでもありますし、それから「役に立つ」ということでもあります。「役に立つ」というのは自分の利益にとつてのことではないですね。他人にとつて有用ということです。「サービスをマスターする」というのは、「ここに来て、どうか私を支援してください」という他者からのシグナルを聴き取る力ということではな

いかと僕は思います。ここでも「聴く」力ですね。他者からの支援の訴えを「待つ」力ですね。「聴く」「待つ」「祈る」、そういう基本的な心身の構えがあり、アカデミアというものはそのような構えの上から始めて成立するものではないかと思えます。

われわれの神戸女学院もそうですが、ミッションスクールには、それぞれの学校に固有の身体文化というか、「型」が伝統的に受け継がれています。みなさんが先輩から受け継がれたものを、ぜひ受け継いで、次世代にまた手渡して行って頂きたいと思えます。

編集後記



ニューズレター第十七号をここにお届けいたします。まず今年度センター長に就任した神田教授による皆さまへのご挨拶に加えて、教授が担当する「ミナト神戸に宗教的多元主義を探る」の紹介です。また樋口センター副長によるプロジェクト「聖典と今日の課題」の紹介が続きます。そして今年度センターのピックアップイベントとなった内田樹神戸女学院大学教授の講演の概要を、内田先生ご自身に寄稿いただきました。

先生の講演会は大盛況でした。若い学生は自己・自我が勝つすぎ、受けること、「待つ」、「聞く」ことが苦手です。そこで就職に係わらせて待つこと、聞くこと、さらには祈ること、つまり「召命」ということの大切さをとても分かり易くお話くださいました。その様子はこの概要からも十分に伝わってきます。どうもありがとうございます。さて本号は紙面カラーになりました。さて本号は紙面カラーに若干の変更があります。関西学院が原田の森に在ったときのスクー ルカラーを正確に再現しました。伝統を守りつつ新たな歩みをあゆんで行きたいと思えます。

(主任研究員・土井健司)